第６課　呪いは原因不明なのか

【暗唱聖句】

「人が神より正しくありえようか。造り主より清くありえようか」ヨブ記4:17

【今週のテーマ】

今週はヨブのもとにやってきた人たちについて考えます。彼らは苦難の意味について答えをだそうとしています。それは今日のわたしたちと同様です。

【日曜日　重大な疑問】

ヨブ記の最初の2章において、天と地がいかに密接につながっているか、すなわち天において起きたことが、地上にも影響を及ぼしているのかという、通常目に見えない世界の現実について垣間見させてくれます。しかし、それ以降はテレビの討論番組のように、ヨブの身に起こったことを、ヨブとその友人たちがいろいろ推測して話しあう場面が永遠と続きます。その推測はすべてこの世の知恵や常識からくるもので、必ずしもすべてが間違いというわけではないのですが、ヨブには人間の考えをはるかに超える、想像すらできないことが起きていたので、誰もそこまで思いが行くものはいませんでした。そのため討論はなお一層ヨブを苦しめるものとなっていきました。ただ、その中にあって、苦難の意味が理解できなくても、良い面があることを聖書は語っています。

「卑しめられたのはわたしのために良いことでした。わたしはあなたの掟を 学ぶようになりました。あなたの口から出る律法はわたしにとって幾千の金銀にまさる恵みです」 119:71、72

詩篇の記者は苦難の良い面を見ることができました。それは卑しめられたけれども、それによって神の掟、律法を学ぶようになったことです。それは金銀にもまさる恵みだと悟ることができたことです。人生の失敗や挫折、困難が、逆に神のもとへとわたしたちを帰らせることがあるということを、わたしたちも何度も経験していることでしょう。そのとき、これが苦難の意味だったのかと悟るのです。

【月曜日　罪のない人がいつ滅びたのか】

「さて、ヨブと親しいテマン人エリファズ、シュア人ビルダド、ナアマ人ツォファルの三人は、ヨブにふりかかった災難の一部始終を聞くと、見舞い慰めようと相談して、それぞれの国からやって来た。遠くからヨブを見ると、それと見分けられないほどの姿になっていたので、嘆きの声をあげ、衣を裂き、天に向かって塵を振りまき、頭にかぶった。2:13 彼らは七日七晩、ヨブと共に地面に座っていたが、その激しい苦痛を見ると、話しかけることもできなかった」ヨブ記2:11～13

ヨブの親しい3人の友がヨブを見舞い、慰めようとしてやってきます。そして、ヨブの姿を見ると言葉を失い、衣を裂いて嘆きの声を上げます。大きな悲しみの中にある人を前にしたとき、かける言葉がないものです。どんな言葉も薄っぺらで、その人を助けることなどできないと感じます。彼らが一緒に泣いてくれたことは、ヨブを幾分かでも慰めることになっただろうと思います。「七日七晩、ヨブと共に地面に座っていた」と書かれてあります。7日間もただ黙って座っていたというのですからすごいことです。普通、苦痛と悲しみの中にある人と、5分でも沈黙の中にあることは長く感じることでしょう。

例話

ある老人ホームに、誰とも口をきかない頑固な老人がいました。他の老人も職員もほとんど声をかけるものがありませんでした。老人はいつも一人でゆり椅子に腰かけながら、ぼっと物思いにふけっているのでした。そんなある日のことでした。一人の人がこの老人のそばにもう一つゆり椅子を運び、何を語るでもなく、一緒に揺られながら、時間を過ごしました。毎週、決まった時間になるとこの男性はやってきて、一緒にゆり椅子に揺られながら、ぼっと一緒に時間を過ごすのが習慣となっていきました。ところが、それからしばらくして、いつもいるはずの老人がゆり椅子に座っていませんでした。実は数日前に亡くなったとのことでした。家族がこの男性のもとにやってきて、ぽつりとこの男性にこう言ったそうです。「いつもおじいさんと一緒に椅子に揺られて、時を過ごしてくれたありがとうございました。おじいさんはそれをとても喜んでいました」と。

7日間の間、黙って座っていたヨブと3人の友人の頭の中には、いろいろな思いがかけ巡っていたことでしょう。この7日間の沈黙は長すぎたのかもしれません。ヨブが最初に口を開いて不平を口にするや否や、友人たちも一斉にそれに対する反論、あるいは彼らの心にあった思いを口にします。彼らの言葉の特徴は、同情や哀れみではなく神学的な主張でした。しかも、その彼らが考える神学的な正しさは、このような悲しみの中にある人に対して、さらに苦しみに追い込むものでした。

主は言われました。「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」マタイ9:13

【火曜日　人と造り主】

友人のエリファズが話し始めます。友人たちの言葉は注意深く読み、正しいのか間違っているのか吟味しなければなりません。正しい部分もあれば、間違っている部分もあるからです。

「あなたの言葉は倒れる人を起こし、くずおれる膝に力を与えたものだった。だが、そのあなたの上に何事かふりかかるとあなたは弱ってしまう。それがあなたの身に及ぶとおびえる」ヨブ記4:4、5

ヨブは多くの弱っている人を信仰によって力づけました。それはエリファズも認めるところでした。しかし、いま自分の身に災いが降りかかると、多くの人を力づけていた人とは思えないほど弱く、怯えてしまっていると言います。つまり、人に言っているようにヨブは生きていない、言動が一致していないということ主張しています。しかし、人間とはそういうものではないでしょうか。人を慰め、力づけるときもあれば、人からの慰めと励ましを必要とするときもあるのです。イエス様でさえ、ゲッセマネの園で祈られるとき、弟子たちにも自分のために祈っていてほしいと言われたのです。

「人が神より正しくありえようか。造り主より清くありえようか」ヨブ4:17

このエリファズの言葉は正しいです。その通りです。しかし、ヨブに関する問題は、ヨブが神よりも正しいのかということではありませんでした。そのようなことをヨブは主張していたわけではないのです。つまり、エリファズの言葉はポイントがずれているのです。的外れなのです。このような会話はかみ合うことがありませんから、ヨブは自分を理解してもらいたいという気持ちが深まるばかりだったことでしょう。

【水曜日　愚か者が根を張る】

「考えてみなさい。罪のない人が滅ぼされ、正しい人が絶たれたことがあるかどうか」ヨブ記4:7

この主張は一見正しい主張のように思えます。ヨブ記5章もこの主張をもとに展開しています。しかし、この主張では、ヨブの苦難はヨブが罪を犯した結果ということになってしまいます。エリファズの主張は正しい部分と間違っている部分が混在している点がやっかいなところです。エリファズの発言のある部分には賛同するけれども、ある部分は賛同しかねるわけですが、一方的に途切れることなく会話を続けるので、正しい意見も間違った意見も一色単となり、そのためにかえって混乱を引き起こします。

「しばらくすれば、主に逆らう者は消え去る。彼のいた所を調べてみよ、彼は消え去っている」詩篇37:10

＊「考えてみなさい。罪のない人が滅ぼされ、正しい人が絶たれたことがあるかどうか」（ヨブ記4:7）というエリファズの主張を支持。

「鳥は渡って行くもの、つばめは飛び去るもの。理由のない呪いが襲うことはない」箴言26:2

＊すべての物事には理由がある。ヨブの苦難にも理由がある。

「権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ」ルカ1:52

＊人を高めるのも低くするのも神の業である。ヨブは低くされたのであろうか。

「この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。「神は、知恵のある者たちを、その悪賢さによって捕らえられる」と書いてあり」第一コリ3:19

＊エリファズは「愚か者は怒って自ら滅び、無知な者はねたんで死に至る」（ヨブ記5:2）というが、神の前では誰もが愚かであり、特別なことはない。

「この貧しい人が呼び求める声を主は聞き、苦難から常に救ってくださった」詩篇34:7

＊「神は貧しい人を剣の刃から、権力者の手から救い出してくださる。5:16 だからこそ、弱い人にも希望がある。不正はその口を閉ざすであろう」（ヨブ記5:15，16）の言葉を支持。

「また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れています。「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない」ヘブライ12:5

＊「見よ、幸いなのは神の懲らしめを受ける人。全能者の戒めを拒んではならない」（ヨブ記5:17）の言葉を支持。

「さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂かれたが、いやし我々を打たれたが、傷を包んでくださる」ホセア6:1

＊「彼は傷つけても、包み、打っても、その御手で癒してくださる」（ヨブ記5:18）の言葉を支持。

「彼らの魂を死から救い飢えから救い、命を得させてくださる」詩篇33:19

＊「麦が実って収穫されるように、あなたは天寿を全うして墓に入ることだろう」（ヨブ記5:26）とあるように、最終的には、すべては神が救い出し、永遠の命へと導いてくださる。

このように、エリファズのヨブに語っていることは、聖書の他の個所にも書かれてあることです。しかし、的を得ていない聖書のみ言葉は、時のその人を大きく傷つけることがあるのです。神の言葉を人を批判したり、戒めたりする目的で軽々しく語ってはならないということです。

【木曜日：判断を急ぐ】

エリファズの語ったことの多くは、間違っておらず、聖書の教えとも合致するものでした。しかし、ヨブを慰めたり、励ましたりすることはありませんでした。わたしにもこのような経験はないでしょうか。それを語るべき状況を間違っていたからでした。判断を急ぎすぎました。エリファズはなぜヨブの身にこのような災いが起きているのか、その背景や理由を知らず、神学的一般論から判断して話しています。しかし、この世界はそう単純ではなく、複雑な事柄が多く絡み合っているのです。だから、言葉を出すときには慎重さが伴うのです。

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。」マタイ7:1、2

＊どんなに正しい裁きであったとしても、人は簡単に素直に聞き入れるものではありません。ましてや、その裁いている人の中にも同じように罪がある場合、逆にその人自身も裁かれてしまうことになるでしょう。

「ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります」第一コリ4:5

＊私たちは先走って人を裁いてはなりません。裁くのは主ご自身に任せましょう。

真理だけでは人の心は動きません。しかし、そこに愛が伴うとき、人の心は動かされることがあります。慰めや同情、憐みが何よりも大切です。